

ホタルの献上と滋賀県

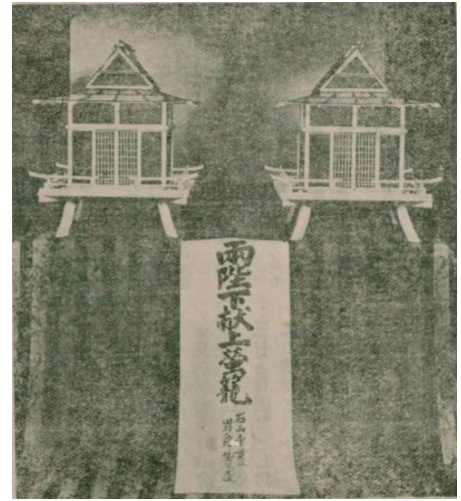
みなさんは、かつて皇室に滋賀県のホタルが献上されていたことを知っていますか？

例えば明治36年（1903年）に石山寺の住職から、後の大正天皇・貞明皇后となる当時の皇太子・皇太子妃が関西に滞在する間の娯楽となるよう、ホタルを献上したいとの願い出がありました。しかも石山寺は以前からホタルの献上をしていたようで、明治30年にはすでに行っていました（同年5月25日付『読売新聞』）。なお石山寺は、後にはホタルを入れる籠を同寺の月見亭の形にするなどの趣向を凝らした献上もしていたようです【写真1】。

また同じく皇室に献上されていた滋賀のホタルが守山ホタルです。そのきっかけは、物部村（現・守山市）の江畑栄太郎という人でした。江畑は、動物学者・渡瀬庄三郎の滋賀でのホタル調査に協力し、その中で守山ホタルの価値に気づき、明治天皇への献上を思いました。江畑は、滋賀県出身の三宮義胤や、かつて滋賀県知事も務めた渡辺千秋といった、皇室の活動を支える宮内省（現・宮内庁）関係者の協力によって明治35年に明治天皇への献上を実現し、毎年ホタルを献上したそうです。また明治43年には守山小学校は、石山ホタルが河川開発や乱獲などで減少する中、代わりに守山ホタルを石山に放つ計画があるほど数も多く、また注目を受けていることなどを理由として、3皇孫（後の昭和天皇・秩父宮雍仁・高松宮宣仁）へのホタル献上の願い出ており、こちらでも毎年行われるようになります。しかし江畑による献上は江畑自身が大阪へ転居したためなくなり、守山小学校による献上だけが続いていきます。



【写真2】天然記念物源氏螢発生地標柱（『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』1936年）



【写真1】「石山寺より献上の螢籠」（『六大新報』1325号、1929年）

このように献上されていた守山のホタルでしたが、石山と同じく乱獲などで数を減らしつつありました。そのため守山小学校に代わって献上を続けていた守山青年団が大正9年（1920年）より保護活動を行うようになります。また同じ時期に「史蹟名勝天然記念物保存法」に基づき、滋賀県保勝会による史跡や名勝、天然記念物の指定に関する調査が行われます。こうした調査もあり、大正13年には当時の守山町と物部村の河川がゲンジボタル発生地として国の天然記念物に指定され【写真2】、その保護が重視されていきました。

【画像出典】国立国会図書館デジタルコレクション

滋賀県の師範学校

みなさんは小学校の先生になるために、どんな学校で勉強をするか知っていますか。現代のみなさんが小学校の先生になるためには、普通は大学で勉強をする必要があります。しかし、昔の人たちは「師範学校」という専用の学校で勉強することになっていました。

今から150年以上前の明治5年（1872年）に、日本はヨーロッパやアメリカの制度になつて小学校をつくることになりました。滋賀県

でも一気にたくさんの小学校がつくられました。しかし、小学校をたくさんつくっても、そこで子どもたちに授業をする先生の数が足りません。そこで国は、東京や大阪に、「師範学校」という小学校の先生を育成するための学校をつくりました。これになつて、滋賀県でも、明治8年（1875年）に「滋賀県師範学校」をつくって先生の育成をはじめました。

このときの滋賀県師範学校は男子生徒だけが通う学校でした。最初の生徒には、江戸時代に武士であった「士族」と呼ばれる人々やお寺のお坊さんが大勢いました。この人たちは、昔から学問に慣れていたもので、先生にはうってつけだったのです。

滋賀県師範学校は、明治13年（1880年）になって、ようやく女性の先生の育成もはじめます。この時代は、女性は家族の着物をつくるが多かったもので、小学校でも女性の先生は、女の子に裁縫を教えることが求められました。

また、この時代は、小学校に入学する年齢になつても、学校に通えない子どもがたくさんいました。大人の仕事を手伝って働かないといけなかったからです。滋賀県師範学校を卒業した小学校の先生たちは、少しでも子どもたちが勉強できるように色々な工夫をしていました。

明治時代の中頃になると、国は「師範学校」の学校生活をまるで軍隊のようにしていきます。大正時代になると、学校のなかで男子生徒は軍事訓練もすることになりました。第二次世界大戦に日本が敗戦すると、このような「軍国主義教育」を反省して、新しい小学校の先生を育成する仕組みがつけられていきます。滋賀県師範学校も昭和24年（1949年）に廃止されて、滋賀大学学芸部（今の教育学部）に生まれ変わりました。



【写真】明治40年頃の滋賀県師範学校
（滋賀県『滋賀県写真帖』1910年）

【画像出典】国立国会図書館デジタルコレクション